結城昌治

軍旗はためく下に

中央公論社

軍旗はためく下に

定価五八〇円

昭和四十五年　七月　十日初版
昭和四十五年十一月二十日八版

著者　結城昌治

発行者　山越　豊

印刷　三晃印刷

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

©一九七〇　検印廃止

目次

敵前逃亡・奔敵　3
従軍免脱　57
司令官逃避　99
敵前党与逃亡　139
上官殺害　205
あとがき　241

装幀　栃折久美子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

敵前逃亡・奔敵

——生きて虜囚の辱（はずかしめ）を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿（なか）れ。

（「戦陣訓」より）

〈陸軍刑法〉

第七十五条　故ナク職役ヲ離レ又ハ職役ニ就カサル者ハ左ノ区別ニ従テ処断ス。

一　敵前ナルトキハ死刑、無期若ハ五年以上ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス。

（以下省略）

註　敵前ニ在ルトハ敵ト直接相対峙シ攻守若ハ警戒ノ要衝ニ当ル状態ニ在ルヲ謂フ。一定ノ期間ノ経過ハ其ノ成立ニ関係ナク職役ヲ離レ又ハ之ニ就カサル行為アルト同時ニ本罪ヲ構成ス。

第七十七条　敵ニ奔リタル者ハ死刑又ハ無期ノ懲役又ハ禁錮ニ処ス。

――中尾さんにはまだご出席頂いておりませんが、昭和二十三年から春のお彼岸と秋のお彼岸という具合に年に二度ずつ、浅草のお寺で私たち同じ部隊にいた者が戦友会をやっています。戦死した仲間たちの霊を弔うため、まず坊さんにお経をあげてもらって、そのあとはいつも酒を飲んで賑やかな会になります。ところが、出席者は年々少くなって、この前の会などはたった六人でした。みなさんいろいろと都合がありましょうし、何しろ敗戦後二十四年以上経っています。それで、今のうちにみんなの思い出をまとめて回想録みたいなものをつくろうという話が持上りました。私が音頭をとったわけではないのですが、留守名簿をたよりに編集委員が手分けをして、なるべく多勢の方に原稿依頼のお手紙を差上げました。その結果、原稿は予期した以上に集りましたが、将校や下士官だった方たちの寄稿が多く、それも手柄話のようなものばかりで、部隊の大多数を占めていた兵隊の話が殆どといっていいくらい欠けています。文章をつづるのが苦手だとか、今さら軍隊のことなど思い出したくないとか、理由はさまざまのようです。しかし、これをこのまま本にしてしまったのでは、部隊のごく限られた部分しか伝えられない。回想録を思いたった私たちには、これを私たち自身の青春の形見にすると同時に、このような青春が存在したことを次ぎの世代の青春に伝えたい気持がありました。戦争の善悪を問うのではなく、軍隊の功

罪を問うつもりもありません。だから勇ましい手柄話や美談も結構ですが、編集委員はまた手分けをして、私は軍法会議で処断された戦友の話を聞いてまわる役を受持たされました。

というのは、私は内地に帰還してから、一時的でしたが恩赦関係の仕事をする機会があって、そのとき、従軍免脱や敵前逃亡、あるいは上官暴行といった軍隊内の犯罪が意外に多かったことを知り、私たちの部隊でもそういう犯罪がいくつかあったことを思い出したのです。そんなわけで、中尾さんには小松伍長の話を是非伺いたいのですが如何でしょうか。部隊が独立混成旅団として編成され、北支に集結したのが確か昭和十五年の三月でした。しかしその後何度も編成替えがあって、南方へ遣られた者は大半が戦死し、そのほかの者もあちこちに散らばってずいぶん死んでいます。それであのころ小松さんと同じ隊にいたひとは、中尾さんしかいないようなんです。

――いや、平山さんがいるでしょう。わたしと同じ四年兵で、やはり最後まで上等兵だった。荻窪辺でクリーニング屋をしているはずです。

――平山さんは亡くなりました。回想録のことで手紙を差上げて分ったんですが、息子さんから返事がきて、二年くらい前に脳出血で亡くなったそうです。

――それは知りませんでしたね。わたしが会ったのは四、五年前です。偶然会って、ちょっと立話をして、それっきりだった。

――十年ほど前、平山さんは一度だけ戦友会に出席されたことがあります。そのとき小松伍長の話がでたのを憶えています。

——どんな風に話してましたか。

——詳しいことは聞きませんが、当時は平山さんも何度逃げようと思ったか知れないと言っていました。そんなに情勢が厳しかったのでしょうか。最前線で苦労されていた方には申しわけないけど、私は大隊本部の糧秣掛をやっていて、小松伍長のことは噂に聞いた程度でした。ほかの中隊でも逃亡があったという噂を聞きましたが、当時の模様をざっくばらんに伺えるなら、活字にするとき、ほかのひとに迷惑がかからないように気をつけます。

——本屋にならべて売るんですか。

——いえ。住所の分っている戦友と遺族に配るだけです。ごく少部数ですが、戦友会の幹事で、印刷屋をしている森さんが費用をもってくれるというので急に回想録の話が運びだしたんです。森さんを憶えておられますか。

——さあ、どんなひとだったろう。

——第三中隊で分隊長をしていました。中支にしばらくいて、私たちの部隊にきたのは昭和十八年の夏頃です。

——憶えていませんね。五年ばかり前から物忘れがひどくなりました。

——私などもそうです。あるいはみんなそうかも知れない。いつの間にか憶えておきたい話を選りわけていて、厭な思い出はどんどん忘れてしまう。だから戦友会で集っても、この頃はみんな愉しかった話しかしなくなりました。

——不思議ですね。
——中尾さんは違いますか。
——わたしは厭なことばかり憶えている。だから戦友会に誘われても、なかなか腰が重くて駄目です。
——中尾さんはずっと北支でしたか。
——ずっとでもありませんが、大体北支です。
——小松伍長の話を聞かせてください。

中隊本部から、坂上少尉の率いる湘李村東方の分遣隊まで、約十六キロの道のりがあった。分遣隊の任務は橋梁警備と附近一帯の治安維持だが、部落を離れてトーチカを設営したのは中国共産党の八路軍ゲリラの襲撃に対する備えである。中国人の保安隊を使役してつくったトーチカは、これも八路軍ゲリラの奇襲に備え、周囲に深い濠をめぐらして普段は跳橋(はねばし)を揚げている。

分遣隊は小隊を二個分隊に縮小編成され、隊長の坂上少尉以下十九名だが、班長の倉田軍曹は、幹部候補生上りの若い上官を疎じていた。

「いいか——」倉田軍曹は討伐の行軍中、隊長に聞えても構わぬというように補充兵たちに言った。「敵にぶつかったらおれの言うとおりにするんだぞ。殺し合いの最中に階級章なんか問題じ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ゃない。死にたくなかったらおれについてこい」
鹵獲品のチェコ軽機を肩にかけた倉田軍曹は、赤銅色に日焼けしたひげづらに眼ばかり険しく光って、いかにも歴戦の勇士らしく頼もしそうに見えた。
そのとき、彼の言葉が先頭を歩いていた坂上少尉の耳に聞えたかどうかは分らない。
しかし、古年次兵の中尾や平山はそれを当然のように聞流したが、下士官候補者の教育を終えてさほど経っていなかった小松伍長は、わざと聞えないふりをするように中尾に話しかけた。
「中尾上等兵は東京のどこだったかな」
「大崎です」
「大崎というと、下町の方だろうか」
「いや、場末の工業地帯ですよ。家は米屋ですけどね」
会話はすぐに途切れた。
小松は間が悪そうに、まだ夜が明けきっていない大行山脈の稜線を眺めた。
彼は東北地方の農家の出身だった。「将校商売下士道楽、兵隊ばかりが国のため」などと言われるが、一般に下士官候補者を志望する者は農家の二、三男に多かった。それは家に帰っても貧しいだけで自分の田畑を持てるわけではなく、軍隊に入るまで米の飯を満足に食ったことがない者さえいた。だから、それくらいならいっそ食いっぱぐれのない軍隊にいた方がましで、下士候を志望する者の心には、郷里の連中を見返してやりたい気持も強いようだった。むろん陸大や陸

士出身のエリートに比較したら大した進級を望めないが、とにかく将校になる道はひらかれているのである。

しかし、小松は下士官になること自体が最初から無理なようだった。ずんぐり太って、動作が鈍く、吃り気味の言語は明晰を欠いた。頭の回転も決して早いとは言えなかった。要領がわるいので、中隊の内務班にいた頃は始終殴られていたうちの一人だった。吃るたびに殴られ、殴られるといっそうひどく吃り、青黒くむくんだ顔がデコボコになるまで殴られていた。そして酒樽のように転がると、尻を蹴られても容易に起上れなかった。

だから彼が下士候を志望したのは、そんな風に殴られていたせいだと見ることができた。彼としては、そのような苦境から脱け出したかったに違いなかった。「下士道楽」というのは、道楽のつもりでなければバカバカしくて勤まらぬという意味だが、彼の気持は道楽どころではなく、下士候教育を必死に耐えてきたはずであった。理不尽な暴力を伴う訓練に耐え得るなら、戦争が長びいて粗製乱造気味になっていた下士官になることは、彼のような者でもそう難しくなかったのだ。

しかし、彼が兵長から伍長に進級して分遣隊へきたとき、周囲は冷い眼で彼を迎えた。下士官クラス程度では、なまじっかな襟章の星の数より入隊した年次の古さがモノを言うが、前線では特にそうだった。古参兵は「小松伍長殿」と呼ばなかったし、倉田軍曹は指揮能力の乏しい彼をあからさまに軽視した。そして、それらのことは新入りの補充兵たちにも影響を与えずにおかな

かった。倉田軍曹が「階級章なんか問題じゃない」と言ったとき、それは小松に対する皮肉と聞取ってもおかしくなかったのである。

高粱畑の間道がようやく切れると、粟や大豆の畑が点在した。ここまでは平坦な道だが、敵兵約一個小隊が潜んでいるという呂江庄へ達するには、黄土層の禿山を越え、岩盤の露出した峡谷を渡らねばならなかった。深夜から歩きつづけ、全員ぐっしょりと汗をかいていた。中年近くなって召集された補充兵たちはとうに足がふらついていた。彼らはもともと体がナマっている上に、銃弾百二十発と手榴弾二個を腰につけ、約二十キロの背嚢を背負い、さらに三八式の重い小銃を担いで歩くのである。

「落伍したら殺されるぞ」

急坂にかかると、倉田軍曹の叱咤が飛んだ。そのひと言は、彼が見たという陰惨な事実を思い出させるに充分だった。それは、作戦が終ってから落伍した兵を探し出したときのことで、その兵は素裸にされて首もとまで土に埋められ、むろん息はなかったが、恐怖のあまりか苦痛のためか、舌を出し涎を垂れ、眼球がとび出していたというのである。

古参の平山上等兵は、――日本軍はもっとひどいことをやっているさ、動くのが厭になったら自爆すればいい、などと胆がすわったように言っていたが、とにかく倉田軍曹が見たという話は、兵隊たちの落伍を防ぐ役に立っていたし、中尾も逃亡を思うたびにその話が脳裡に浮かんだ。

――中尾さんも逃亡しようと思ったことがあるんですか。

――今だから平気で言えるけど、ありましたね。深刻に思いつめたわけじゃないが、考えたことは何度もあります。

――日本軍の勝利を信じていなかったんですか。

――負けるとは思っていなかったが、ハッキリ勝つとも思っていなかった。ただ、早く戦争が終ってくれればいいと思っていました。前線のトーチカなんかにこもっていると、戦争の大局は全然わからない。討伐だって、こっちがやらなければ向うがやってくるので、一種の示威運動みたいにやっていたようなものです。ガダルカナル島の日本軍が撤退したことも知らなかったし、アッツ島の玉砕も知らなかった。でも、船乗りの経験者などが次ぎ次ぎに転属していって、南方の戦線が広がっているんだなという程度は分りました。それに電話線の銅線が鉄線で代用されたりして、資材が不足してきていることも分りました。わたしは独身だから気楽なはずですが、それでも帰りたかったし、妻子を残してきた補充兵などは本当に帰りたかったろうと思います。

――小松伍長も独身でしたね。

――そうです。彼は農家の長男で、妹が一人いた。現役のまま持っていかれたのは彼と平山とわたしの三人しかいなかったが、小松は私や平山より一年あとです。だからわたしなどは、若いくせに割合大きな顔をしていられたわけだけど、倉田軍曹は二度目の応召だった。

――倉田さんは怖がられていたようですね。
――ええ、烈しい気合いをかけるひとで、わたしも大分殴られたことがあります。その代り戦闘のときはいちばん勇敢で、隊長より遙かに頼り甲斐がありました。高粱酎(チャンチュー)を飲むと陽気になって、流行歌を歌うのが得意だった。「無情の夢」とか「旅笠道中」とか、今でも倉田軍曹の声を憶えています。ドラム罐を叩くような声でしたがね。
――討伐の話をつづけてください。小松伍長が逃亡したのはそのときですか。
――違います。

峡谷の浅瀬を渡ると、小さな盆地がひらけ、未明の薄靄に杏の白い花が浮かんでいた。部落は静まり返って物音ひとつしない。
坂上隊は崖の斜面に伏せて、中隊本部からくる尖兵小隊の信号弾の合図を待った。
「おかしいな」
しばらくして倉田軍曹が呟いた。静か過ぎるというのだった。
「斥候をだしてみるか」
坂上少尉が言った。
「いや」

倉田軍曹は首を振った。
そのときだった。突然銃声がつづいた。大地に響くような重機関銃の音だった。
「東の方角だ。尖兵隊がやられている」
倉田軍曹の声は落着いていた。
信号弾はまだ揚がらなかった。
銃声はますます烈しかった。
「救援に行こう」
坂上少尉の眼が血走るように光った。興奮していることは声でも分った。
「駄目だ」倉田軍曹はきっぱり言った。「敵は一個小隊どころじゃない。ちゃんと情報をつかんでいて、先制攻撃をかけている。いま飛び出したら、おれたちも全滅だ。敵はこっちにも重機を向けているに違いない」
「どうしてそれが分る」
「それくらい分らなくてどうする」
「しかし友軍がやられている」
「ぼやぼやしてるからやられるんだ。討伐はピクニックじゃない」
「見殺しにするのか」
「已むを得ない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.